

# 少女の 自己肯定感を 高めるキャンプ



目次	2	ページ	会長のことば・事業概要
	3	ページ	現代の子どもたちと「自己肯定感」
	5	ページ	調査シート作成
	6	ページ	調査結果
	7	ページ	事例報告
	10	ページ	指導者養成にむけて



## 会長のことば



平成20年度 ガールスカウト日本連盟は、「思春期の少女の自己肯定感を高めるためのプログラムと指導法の研究」を実施しました。事業をご委託くださった文部科学省には衷心より感謝申し上げます。

さて、ガールスカウト日本連盟は来年、90周年を迎えます。この運動が、長きに渡って続いてきたのは、誠実・信頼・勇気といった精神性を価値としつつ、将来の社会を担う女性の能力開発に強い影響力を持ってきたからだと思います。100周年を視野にさらにこの運動を広げ、社会に役立てていくには、当連盟の教育プログラムが普遍性を持つことの実証が望まれてきました。

この青少年元気サポート事業は、キャンプや話し合いなど、さまざまな活動において少女が達成感を味わい、自己肯定感を高めることを調査実証するのにまたとないチャンスとなりました。また、指導者の声のかけ方や関わり方によって、少女たちの自己肯定感が一層高まることも分かりました。

幸いにも、専門の研究者のご協力をいただいて、ほとんどの実践において、明確な結果を得ました。活動は得意でも、理論化に苦労していた教育プログラムに新しい光が当たり、少女のみならず、指導者たちにも自信を与える結果となりました。今後は、この結果をふまえ、困難にもプラス思考でチャレンジしていく次世代の育成に努力いたします。一層ご支援下さるよう、お願い申し上げます。

社団法人 ガールスカウト日本連盟  
会長 石井直子

## 事業概要

思春期の少女の自己肯定感が一般に低くなる傾向にあることを受け、ガールスカウトが日頃行っている少女のための体験活動が自己肯定感に及ぼす効果を検証するため、右図の体制により、5つの実行委員会が事業を実施、調査研究を行いました。

また、これらの活動プログラムや、指導者との関係を調査していくため、独自の調査シートの作成を行い、事業の成果を基に今後の指導者養成に含む内容について検討しました。

### 少女の自己肯定感を高めるためのプログラムと指導者の研究

運営協議会

「自己肯定感」尺度の作成

実行委員会

指導者チェックシートの作成

事前研修

少女のための事業の実施

全国キャンプ

神奈川県支部キャンプ

静岡県支部キャンプ

兵庫県支部キャンプ

全国プログラム調査対象  
キャンプ

野外活動指導者セミナー

運営協議会

分析

成果の発表  
フォーラム

報告書の作成

# 現代の子どもたちと「自己肯定感」

## 今日の子どもたちが抱える問題

- 不登校 ● 引きこもり ● いじめ
- 薬物乱用 ● 突然の暴力

## 行動の特徴

- 突出する攻撃性 ● 希薄な規範意識
- 強い失敗回避傾向
- 稚拙な対人関係

## 心的特徴

- 乏しい耐性 ● 乏しい表現力
- 低い自己評価（自己肯定感の低さ）

なかでも低い自己評価（自己肯定感の低さ）は、すべての問題の核になっている。



**今**、子どもたちが抱える課題は左記のようにさまざまなものがあります。挨拶ができなかったり、ささいなことでパニック状態になったり、「入れて！」の一言が言えないなど、他の子とうまくコミュニケーションが取れない子は今や特異な存在ではなく、85万～100万人いると言われ、ニート（Not in Education・Employment or Training）と言われる社会に出られない若者の増加と直接結びついています。

このような社会問題化している子どもたちの変化の根底にあるものとして、**低い自己肯定感**と、そこからくる**人とかわる力の弱さ**が指摘されます。



**自己肯定感**とは、今の自分がしていることや考えていることなど、自分のあり様はさまざまだけれど、「まあ、いいかな」と思える**“自分自身のあり方を概して肯定する気持ち”**とすることができます。

小学4年生から高校生まで5000人余の調査結果では、「今の自分が好き」と自分を肯定的に受けとめられる子は、小学4年生では7割台ですが、5年生では6割台、6年生では5割台まで下がり、中学2年生から5割を切る状態にあります。この傾向は男子よりも女子に著しく、

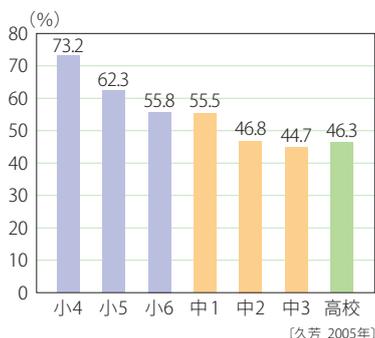
小学4年生では男子より高かった自己肯定感が、学年が進むにつれて大幅に低下し、中学2年生以降は4割台となり、男子との差が統計的に有意<sup>(※)</sup>になっているのです。

※有意とは：統計上必然的であること。

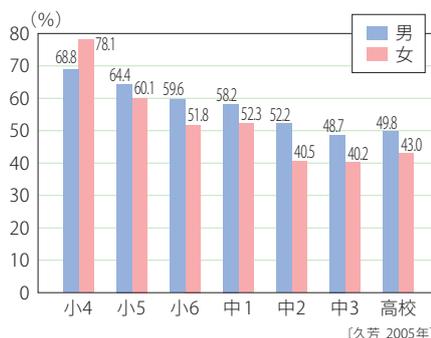
「自分が好き」と思えるか、**自己肯定の気持ちを持てるか否かは生きていくうえで重要なこと**です。なぜなら、自分を肯定する気持ちは意欲ややる気を生み出し、新しいことへの挑戦を勇気づけ、自信へとつながるものだからです。

## DATA

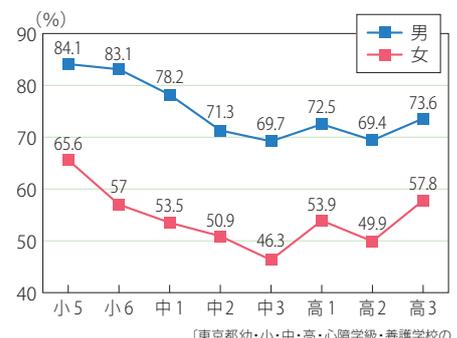
■ 自己肯定感 学年推移



■ 自己肯定感 男女別学年推移



■ 男(女)でよかったと思う割合 (性自認)



なぜ  
自己肯定感が  
必要なのか



**社** 会から引きこもってしまう子の特徴の一つが他者とのかかわる力の弱さです。

従来、人とのかかわり方は教えられるものではなく、親が他者とのかかわる姿を見て覚えたり、子ども同士と一緒に遊ぶ中から学んだものなのです。しかし、近隣との付き合いがほとんどなく、塾や習い事で放課後に社会性の基盤を培う子どもたちだけの集団で遊ぶ機会が低下するなど、**子どもが人とのかかわりを自然に身につける機会が失われてきています。**

自分を肯定的に受けとめられる**自己肯定感のある子ども**たちは、友達や教師など**他者とのかかわりも良好**との調査結果があります。それは、自分と違う価値観を理解し受け入れ、自他ともに尊重した関係を築けるからであり、これは、国際社会で自国の立場を主張しながらも意見の異なる他国と協調する姿勢そのものです。今の国際社会においては、文化や価値観の異なる世界の国々との**共生**が大きな課題です。21世紀の主役として活躍する子どもたちが身につけてほしい、いえ、身につけねばならない重要な資質の一つです。

**そ** れでは、他者とよい関係を結び、困難なことにも挑戦する意欲につながる自己肯定感、どうしたら高めることができるのでしょうか。

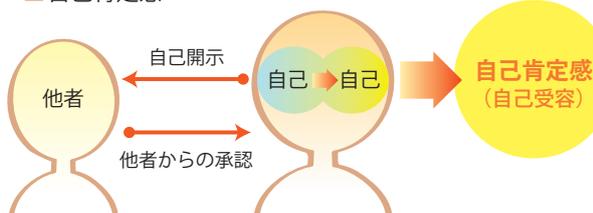
基本的には「**他者からの承認**」が重要です。人は自分のよさにはなかなか気づきません。欠点を指摘されて「よし！負けないぞ」と奮起する人よりも、褒められて「よし、もっとがんばろう」と思う人の方がはるかに多いことでしょう。

子どもたちが自己肯定感をもち、高め

られるよう、**その子のよいところをしっかり認め、伝えていく**ことが大人の役割となるのです。

自己肯定感を  
高めるために

■ 自己肯定感



ガールスカウトの活動と自己肯定感



東京女子体育大学 教授  
久芳美恵子

平成20年度に実施されたガールスカウトの事業に参加した少女1,177名の調査結果は、私にとって驚きの結果でした。活動前に見られた少女たちの特徴は自己肯定感を構成する8項目のうち、「気分が落ち込んでいる時、なぐさめてくれる友人がいる」の「**友人関係構築力**」が高く、「自分をほめてあげたいと思うことがある」の「**自己受容感**」が低いものでした。

ところが活動後の調査では「**自己受容感**」の伸びが最も高く、活動を通して自分を受け入れる気持ちが高まったことが分かりま

す。それ以外の「なりたい自分になれるように努力できる」の「**自己実現力**」や「失敗をおそれずチャレンジできる」の「**行動力**」等、8項目全てで活動後の平均値が活動前に比べ有意に高かったのです。

このことは、**ガールスカウト活動が「自己肯定感を高めるために有効である」ということを意味しています。**

小学校時代はリーダーシップをとっていた女子も、共学制の中学・高校に入ると、男子を補佐する役割に回ることが少なくありません。ガールスカウトは女子のみの団体であるが故に、女子がリーダーシップをとり、困難なことを自分たちだけで解決する等の活動を通して、自分の潜在力に気づき、自己肯定感を高めるよい場となっているのだと思います。

セルフ・エスティーム  
[Self-Esteem]

セルフ・エスティームのある子どもは、他者を肯定的に捉える傾向があり、人に心温かく接することもできます。ですから、豊かな人間関係を作りやすく、異文化を背景に持った人たちの生活においても、寛大で、受容的な態度がとれるのです。また、困難な場面に出会っても、他者に直に依存するのではなく、進んで解決をしようとします。逆境のなかでも、希望を捨てず、行動するのです。

スーザン・ファウンテン  
『いっしょに学ぼうー学びかた・教えかたハンドブック Learning Together Global Education 4-7』P.24  
(国際理解教育センター1994年発行)より一部抜粋  
ERIC 国際理解教育センター TEL 03-5907-6064

セルフ・エスティーム(自尊感情)は、「自己肯定」と意味の近い言葉です。

# 調査シート作成

「自己肯定感が高い状態とはどんなときか」について、全国キャンプ実行委員をはじめとする指導者30名に、各自10個挙げてもらおう。

指導者30名が挙げた297個について運営協議会で、類似したものをまとめ、24のカテゴリーに分類。

それぞれのカテゴリーから、バランスよく36の設問を精選。

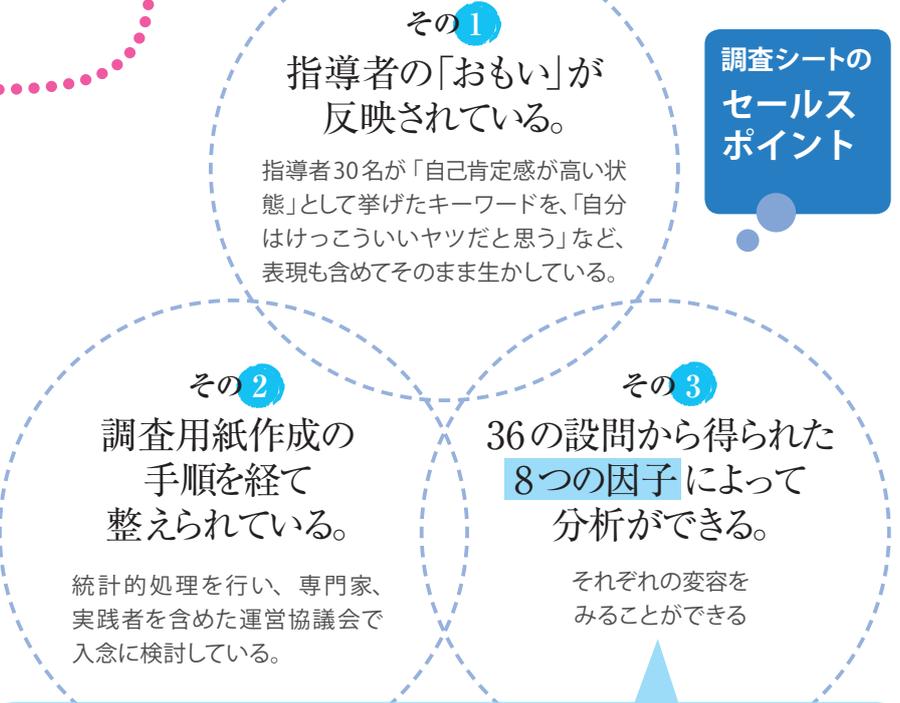
36の設問による調査シートが完成

6名(全国キャンプ実行委員)の高校生を対象に予備調査を実施。その後、微調整し、1,177名の中・高生を対象に本調査を実施。

本調査でのデータを用いて因子分析

因子の命名・その他調査との相関関係・信頼性の検討

ガールスカウト日本連盟オリジナル調査シートの完成



調査シートのセールスポイント

- 【行動力】** 失敗をおそれず行動を起こす力
- 【友人関係構築力】** 真の友をつくれる力
- 【所属感】** 居場所・よりどころが持てる
- 【プラス思考力】** ラッキー・Happyと捉えられる力
- 【自己判断力】** 自分の考えをしっかりと持てる力
- 【自己受容感】** 自分をほめてあげられる
- 【自己表現力】** 自分を「表す」ものを培う力
- 【調整力】** 他者を受容し、自分を律する力

自己肯定感

# プログラムの効果測定

ねらい

調査シートを用い、キャンプ前と終了後に実施。事前事後の調査結果を比較検討し、事業が少女たちの「自己肯定感」に与える影響を分析する。

調査対象事業および対象者

実行委員会実施の6事業を含む、全国各地の47事業に参加した中学校1年生～高校3年生までの女子生徒1,177名

分析の視点

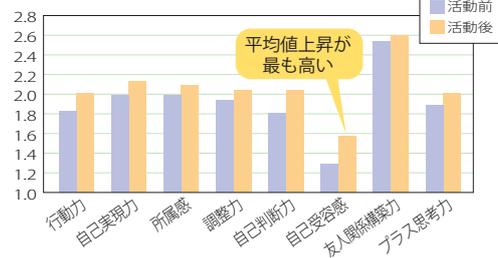
各事業において、8つの因子を分析の視点として用い、それぞれの事業を評価。

## 調査結果

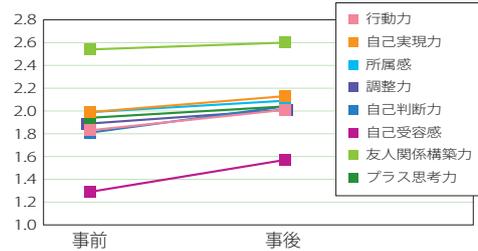
### 事前調査



### 活動前後の平均値比較 (全体)



### 事前事後の比較



データ：平成20年 夏期キャンプ35事業 872名(有効なものは749名)  
〔(社)ガールスカウト日本連盟 2009年〕

### 結果から

#### その1 事前調査から

ガールスカウトの事業に参加した対象者は、もともと「友人関係構築力」が高いが、「自己受容感」が低い。

#### その2 事後調査(体験後)から

「自己受容感」の伸びが最も大きく、次いで「自己実現力」「行動力」「自己判断力」と続き、**全因子で活動後の平均値が、活動前に比べ有意に高い。**  
「自己肯定感」を構成する8因子が体験後に高くなったことから、ガールスカウトの活動(事業)において、「自己肯定感」を高めることができたといえる。

DATA

## ガールスカウトの活動は「自己肯定感」を高める



国立能登青少年交流の家  
中村織江

「自己肯定感」って、分かっているようで分かっていない言葉です。それが今回の調査研究事業により「自己肯定感」が、

「行動力・自己判断力・自己表現力・自己受容感・友人関係構築力・所属感・プラス思考力・調整力」という8つが相互に作用し合う力であるのではないかと示されました。「自己肯定感を高めるプログラム」というのが「ハードル高いな」と思われたら、それら8つの能力を育てることを切り口にしてプログラムを組んでみたらいかが

でしょう。「“行動力”を高めるためにはどんなプログラムが適しているかな」というように。そうすることで、自己肯定感を高めるプログラムに近づいていくはずですよ。

提供している体験活動のすばらしさや組織力の強さに加え、それを評価する方法も整ったガールスカウトの活動に今後も期待大!です。

## 全国キャンプ



食材の配給。ユニットでの分け方、共用品の調味料の保管の仕方など、「自分たちで決めたルールだから」守ります。

### 期 日

平成20年7月31日(木)～8月4日(月)  
[4泊5日]

### 会 場

戸隠ガールスカウトセンター  
(長野県長野市)

### 参加人数

高校生135人、  
アメリカ連盟ガールスカウト5人  
計140人

### テーマ

「開花宣言'08  
～咲かせよう戸隠色の花～」

### ねらい

高校生年代の少女の達成感、自己肯定感を高め、リーダーシップにつなげる。

## 自己肯定感を高めるために 必要なこと

### ●指導者による「目的」の共有

まず指導者が、2回の事前研修において「少女の自己肯定感を高める」というキャンプの目的と、参加者の自己肯定感を高めるための指導者の役割と支援方法について共通理解し、キャンプ当日、プラス思考で下記のような支援にあたった。

## 自己肯定感につながった、 キャンプのしかけ

### ●生活を自分たちで作ること

高校生のキャンプ生活では、28人で構成する「ユニット」でいろいろなことを決定、運営した。

各ユニットでは、参加者の中からユニット長を選出し、ユニット内の5つのグループのグループ長とユニット長による会議で、資材や食料のユニット内の配給や管理の方法や、ユニットごとのプログラム(朝のつどい等)について話し合い、実行した。生活する中での問題や提案についても、グルー

プ代表がそのつど話し合っってルールを考えることで、コミュニケーションが生まれた。

### ●認めること、認められること

キャンプでは、ユニット付、マネジメント担当の区別なく、すべての指導者が他のグループとの比較ではなく、各グループの成長を重視して、表彰できるよう記録し、キャンプ中に全グループが表彰されるように仕掛け、表彰時には理由を明確に伝えた。参加者同士も自主的に感謝カードを作るなどし、自分が認められる経験、他人を認める経験から、自己受容感が向上した。



閉会式の「開花宣言」…参加者一人ひとりがキャンプで「変わったこと」、自分が咲かせた花を花びらに書いたものを、ユニット長が掲げました。

## COMMENTS

**キ**ャンプ生活は「同じ釜の飯を食う」という言葉で表されるように、仲間と同じ体験をすることが基本です。今回のガールスカウト全国キャンプにおいても、寝食を共にするグループ生活を通して話し合いや互いに協力をする場面がたくさんありました。人には、「他の人から受け入れられたい」という欲求があります。人に受け入れられなければ、自分の思うこともできません。他者が、何を考え、感じているかに心を配り、自分の言動がどう響くかに注意しなければなりません。それは様々な体験の場に単に参加しているのではなく、心からの関わりを大切に「時間を共有」することで、相手を受け入れることができ、他者をそして自分自身を大切にする心が生まれると思います。

ガールスカウト全国キャンプで高校生たちは、グループ生活や自分たちが企画、運営した様々なプログラム活動などで、一人ひとりが、自分の花(心)を咲かせ、みんなで開花宣言を行ったわけです。個が大切にされる現代社会だからこそ、集団の中でないと咲かない花(心)もあるのではないのでしょうか。

ラボ教育センター教育事業局  
研究員 清水幸一

**昨**年の8月、長野市戸隠での全国キャンプと、戸隠ガールスカウトセンターを見せていただきました。

全国から集まった高校生の皆さんは、このようなキャンプに参加でき貴重な経験をされたことと思います。私も高校時代から山登りを始め、テントの中で喧嘩もしたけれど、歌ったり、語りあったりして、楽しい思い出をつくりました。

キャンプの効果は、色々あると思いますが、私としては、濃厚な人間関係を築けることが一番だと思っています。今の時代、携帯電話やメールで友人をつくる方もたくさんいると思いますが、簡単につくった友人関係は、心地良い人間関係だとは思いません。高校生の皆さんは、これからの長い人生においては、決して、心地良い人間関係ばかりではないと思います。様々な軋轢や正当な事も通らないのが、人間関係だと思います。

若い皆さんには、キャンプを通じて、大いに人間関係に悩むことが大切だと思います。

私は、5月22日(ガールスカウトの日)生まれですが、今後とも長野県職員として、ガールスカウト運動のお手伝いをしていきたいと思っています。また、長野市の戸隠でお会いできる機会を楽しみにしています。

長野県教育委員会文化財・生涯学習課  
生涯学習係長 宮崎忠久



## 神奈川県支部



### 期 日

平成20年7月29日(火)～8月2日(土)  
[4泊5日]

### 会 場

国立中央青少年交流の家  
(静岡県御殿場市)

### 参加人数

中学生13人、高校生6人  
計19人

### 目 的

同年代とのキャンプ生活を通して交流を深めると共に、自然の中で、普段の自らの生活をふりかえる。

### キャンプのポイント

自己肯定感を高めるため、達成感を得るきっかけとして、メインプログラムを富士登山とし、富士山の山小屋に1泊した。

### 事前準備

#### ●指導者間の打ち合わせ

特に事故や病気への対応など、安全面について話し合った。

#### ●サポート体制

登山時は地元のガイドを依頼。

#### ●参加者事前研修

参加のための説明だけでなく、チームづくりに力を入れた。模造紙に一人ひとりが手を当て大きな輪をペンでかたどり、外側には、「全員が一緒に達成するためにやっ

てはいけないこと、しないほうがいいこと」を書き込み、内側には「達成するためには、それぞれが何を心がけて参加したらよいか」ということを書き込み1枚の模造紙を仕上げるというワークをした。

### 成果

富士登山では、自分たちのそれぞれのペースで歩いていくということを事前に確認していたので、先に着く子どももいれば、後からゆっくり遅れてくる子どももいた。山小屋に着いてからも、気分が悪くて夜眠れない子どももいたが、翌朝は山小屋からのご来光を見ることができた。ご来光を見ることができたことで、全員のふりかえりに「感動した」との記入があった。

子どもたち自身が、辛いと思いつつもながらもゆっくり自分のペースで最後まで登りきれたことが、大きな達成感につながった。

## 静岡県支部

### 期 日

平成20年8月21日(木)～24日(日)  
[3泊4日]

### 会 場

①東部：三島市立箱根の里  
(静岡県三島市)

②中部：浜石野外センター  
(静岡県静岡市)

③西部：浜松市立青少年の家  
(静岡県浜松市)

### 参加人数

①未就学児3人、小学生124人、  
中学生29人、高校生1人 計157人

②未就学児9人、小学生132人、  
中学生27人、高校生6人 計174人

③未就学児2人、小学生102人、  
中学生16人 計120人

### テーマ

SOS、地球を助けよう  
～水、きれいな水を残すために  
(全会場共通)

### 目 的

自然を大切にすることを学ぶ。仲間との友情を築き自己を知る。キャンプでの体験をその後の活動や日常生活につなげる。

### キャンプの様子

#### ●指導者の配慮が子どもたちの力になった瞬間

中部ブロックの会場では、キャンプ場までの9kmの山道を約3時間かけ、就学前から小学校低学年の子どもが登った。途中、「大声をだしてみよう」「うしろを見てごらん、いい景色だよ」などのメッセージをポイントに置き、見た子どもたちは、「うわー!すごい!」「きもちいい!」など、気分転換しながら元気に登ることができた。

#### ●中・高生の心の変化

●中・高生は実行委員として前日に1泊し、翌日入所してくる参加者に対し、「どんなことができるのか」「何をしたら役に立てるのか」などを考えた。●ミーティングにより、仲間意識が芽生え、連帯感が深まり、「私たちの考えたプログラムを実行しよう」と、自主性のある積極的な発言が多く出た。

●事前に打ち合わせたことが生かされ、年少の子どもたちに慕われることに喜びを感じた ●指導者たちからの「ありがとう、助かったよ」などの感謝の声かけにより、達成感を得た。



#### ●アクシデントを乗り越えること

●大雨の中の撤営では、皆が協力し合い、連帯感や協力する気持ちがますます大きくなった。●さまざまなアクシデントを乗り越えることが、「やればできる」という自信につながり、達成感につながった。

### キャンプで子どもたちが得たもの

●自然への気付き ●精神的に強くなる  
●普段できなかったことができた ●チームワーク ●体力的にも限界の中で作業ができた ●自分の役割に責任を持てた

### キャンプで指導者が得たもの

●子どもたちの気持ちを大事にすることができた ●自然の中で仲間とともに生活体験する中で、我慢、責任感、自己決定、自然への気付きが得られるよう意識し、企画し、継続的に活動していくことが大切であることが分かった ●小さい頃からの耐える体験は大事であると感じた

# 兵庫県支部



## 期 日

平成20年8月9日(土)～12日(火)  
[3泊4日]

## 会 場

兵庫県立南但馬自然学校  
(兵庫県朝来市)

## 参加人数

中学生29人(一般1人含む)、  
高校生7人 計36人

## テーマ

少し大人の私を見つける  
～encourage myself～

## 目 的

「やくそくとおきて」のもと、さまざまなプログラムにチャレンジし、野外活動や自然体験活動の楽しさを知る。

## キャンプのポイント

- 「少し大人の私を見つける」のテーマだけが、3泊4日、一人歩きしないよう、でも最後には気付いてもらえるよう、各プログラムで工夫をした。
- 「今までにしたことのない大胆なチャレンジをする」ためのプログラムとして、パラグライダーに挑戦した。

## 事前準備

### ●指導者間の思いの共有

「キャンプに参加する少女たちにどう感じてほしいか」、「キャンプ後どのようにしてほしいか」、「自己肯定感を高めるとはどういうことなのか」を確認し合い、挨拶はもちろんのこと、できたことを褒める、困っている様子があれば何に困っているかを聞くなど、声かけを意識するようにした。

### ●子どもたちの自主性を育てるために

子どもたちの自主性をより尊重するため、パトロール(グループ)付きのリーダーを固定せず、指導者が柔軟に対応できるようにした。ただし、上記の声かけに加え、「ちゃんとあなたのことを見ているよ」という姿勢

を心がけた。また、キャンプ中に子どもたちが企画・実行するプログラムを用意した。

## 成果

### ●パラグライダーへの挑戦

「私ってできるんだ」「一人で空を飛び、無事に着地することができた」ということが自信につながり、行動力、自己判断力の向上につながった。

### ●自分たちでプログラムを企画・実行

行動力や自己表現力の向上につながった。

### ●さまざまな挑戦

自ら考え行動し、気付き、受け入れられたという体験が、自己受容感の向上につながった。

### ●3泊4日をとおして

「こんなこともできるんだ」という体験ができたこと、友達を励ましたり、一緒に成功を喜んだり、仲間と協力し合い、認め合ったことなど、さまざまな体験を通して子どもたちは「少し大人の私」を見つけることができた。



## 教育相談的3つの基本 — 共感的理解・肯定的な見方・傾聴 —



東京都教育相談センター  
統括指導主事

岡部君夫

子どもたちの自己肯定感を高めるためにも、教育相談の3つの基本「傾聴・共感的理解・肯定的な見方」を大切にしていきたいでしょう。

「傾聴」には、①話しやすい雰囲気をつ

くる。②先入観をもたずに聴く。③質問をできるだけ控える。④相手の発言をじっくり待つ。⑤勝手な解釈や評価、批評はやめる。の5つのポイントがあります。具体的には、●あいづちを打つ。●相手の言葉や思いを繰り返す。●相手の訴えを整理してはっきりさせる。●相手の言葉をさえぎる言葉を使わない。などに配慮することが重要です。

「共感的理解」とは、相手の言動や行動

を共感して捉え、対応することです。指導者と子どもの関係は、ややもすると指導的になりがちです。子どもの主体的な問題解決や個性・能力の開発には大切な考え方です。

「肯定的な見方」とは、現在のある姿を認めた上で対応することです。この姿を肯定的に捉え、現在の課題を発見し、次の一歩を踏み出せるように指導者が援助していくことが大切です。

# 指導者に必要なこと

今回の調査・研究を通してみてきた

キャンプの際、指導者にアンケートを実施し集計してみると、次のような声が多くみられました。

- 言葉かけはつねに心がけていたつもりです。
- 少女たちの生き生きした顔がみられよかった。
- 「こうすれば良かった」と反省することばかりです。
- 経験不足を感じました。今後の課題がみえました。
- あまり一人ひとりと関わる余裕がなかった。
- 事前の打ち合わせができていなかった。
- すべきことがみつけれない子には、何をすればいいか教えた。
- 役割分担がよくできていた。

今回のアンケートでは、次の傾向がみられました。

- キャンプ全体に時間的余裕がない。
- 指導者が想定外の展開を避けたいがっている。
- 指導者がマイナス思考である（「～ができなかった」という書き方）。
- 全体的に指導者間のコミュニケーションが不足している。

青少年支援サポート事業  
指導者用シート

ガールスカウトでは、少女の自己肯定感を高めることが活動の目標として大切なことのひとつだと考えています。今回の事業で、あなたは次の項目についてどのように少女と接しましたか。事業全体をふりかえりながら回答してください。

所属	氏名	この事業での担当
①少女たちがコミュニケーションを取り合い、仲間との関係が深まるような支援ができましたか？	その理由	
②少女たち一人ひとりの得意分野をみつめ、自信につながるような支援ができましたか？	その理由	
③さまざまなチャレンジができるような(苦手なことに挑戦する など)きっかけづくりができましたか？	その理由	
④少女たちが互いに認め合い、助け合うような言葉がけや、機会の提供ができましたか？	その理由	
⑤少女たちが役割行動をするために、配慮ができましたか？	その理由	
⑥少女が事業を通して達成感を感じることができるよう工夫ができましたか？	その理由	
⑦少女たちの声(意見 など)をちゃんと聴けていましたか？	その理由	
⑧少女たちが認める言葉がけ、または少女が認められたと感じる言葉がけができていましたか？	その理由	
⑨指導者間の連携や、役割行動はスムーズにこなされていましたか？	その理由	
⑩この事業に関わった指導者として、あなた自身の達成感は何を得られましたか？	その理由	



コミュニケーション

## 少女の自己肯定感を高めるために指導者が心がけるべきこと

少女たちの様子など、指導者が同じ情報を共有して、集会や行事を進めることが必要です。そのことが少女たちへの支援につながります。指導者は、少女とコミュニケーションをとることを意識し、さらに指導者間でしっかりとコミュニケーションを図ることが必要です。

### 達成感

野外での生活や困難なことへのチャレンジが少女たち自身の達成感につながります。野外での生活は日頃の便利な生活とは異なり、不便さを感じ、それを克服することが少女の成長に役立ちます。成長には、失敗と達成感が必要です。

### ゆとり

指導者は、予定外のことがおきても、失敗で終わらせず、考える力をつけるよい機会としてつなげていく意識が必要です。またキャンプの時は、プログラムにゆとりがない傾向がみられるので、少女たちがより多くの達成感を得られるよう意識してプログラム計画をしましょう。

### 言葉かけ

指導者は、他人との比較ではなくて、少女一人ひとりの過程をみていくことが必要です。その上で、一人ひとりに合った言葉かけを心がけましょう。

### 評価

体験をすること、体験の場を提供することは大事ですが、そこにかかわる指導者は常に目的・目標を意識し、次につなげるために少しの時間でもふりかえり、評価をすることが必要です。自分たちの団の集会や行事をするときにも目的・目標を決め、計画を立て、実施し、評価をすることが必要です。また、時には第三者に評価してもらうことが、指導者の成長にもつながります。評価という視点を持ちましょう。

マイナス思考からはよいものは生まれません。プラス思考を心がけましょう!!

少女の自己肯定感を  
高めるために指導者が  
できること…



## 「褒める」と「認める」

指導者のみなさんのかかわり方が、子どもたちの成長に大きく影響を与えると  
いう点から、「褒める」と「認める」とい  
う言葉の使い方を例に、大切にしたい方  
向性について考えたいと思います。

「褒める」とは、「〇〇ができてす  
ごいね」であり、「じゃあ、できないところ  
はダメなのね」と、ある部分だけを採り  
上げて表現しています。すると、表現を  
していない外側、褒められない部分が生  
じます。

一方で「認める」は、「とても素敵だね」  
「好きだよ」「すごいね」と、一部だけで

なく、**存在全部を認めて**表現しているの  
ではないかと考えます。

今回のアンケート集計から、ガールス  
カウトの指導者のみなさんは、非常に真  
面目であると感じました。と同時に、こ  
の真面目さが、よい方向に作用するか、  
悪い方に作用するかということを考えま  
した。真面目さが完璧を求めてしまうと、  
辛くなるのではないのでしょうか？ 完全  
とか完璧とか「絶対」はないと思います。  
『『絶対』という言葉があるなら、『僕は  
いつか死ぬ』ということだけ。これ以外  
は何があるか分からない。だから、絶対

なんてあり得ない」と私は考えています。

こんな風に完璧や絶対がないと思え  
ると、「認める」ことや、未来に向かってい  
くことが上手くできるんじゃないかと思  
います。

**プラスで考えるか、マイナスで考える  
か、それは本当に考え方ひとつ**です。子  
どもたちと共にある時間を「子どもたち  
にとって**プラスな時間**にできたらいいな」  
と私も願っています。

株式会社 日能研  
代表 高木幹夫

## ガールスカウト活動の指導者にみえたこと

ガールスカウト活動の指導について考  
えてみます。ガールスカウト活動の大き  
な特徴は、就学前から成人に至るまでの  
長期間にわたり同じ組織に所属し、同じ  
教育理念のもとに、活動ができること  
です。指導を受ける立場、指導をする立場  
共に長期にわたって成長する機会がある  
ことです。どちらの立場であれ、活動に  
参加して仮にそのとき満足な結果が得ら  
れなくとも、**共に振り返り、評価し合い、  
また先輩から批評をもらい、繰り返し成  
長する機会**が多くあることです。試行錯  
誤を繰り返すことにより、いい指導者と

して成長し、また繰り返し活動に参加す  
ることにより立派なスカウトに成長しま  
す。

活動報告のアンケートをみて気付く点  
があります。それは指導者が成果を早急  
に求めすぎることです。良い成果が出な  
かったのは指導方法が良くなかったと結  
論づけています。数日間のキャンプにも  
かかわらず、多くの成果を求めすぎて  
いるように見えます。先に述べましたがチ  
ャンスは多くあります。一回のキャンプで  
**成果をあまり欲張らず、長期の目標をた  
て、少しずつ前に進むことが大切かと思**

います。指導者が教えるのではなく、子  
どもたちが学べる環境をつくることです。  
時間がかかります。とくに課題の負荷の  
設定と余裕のある活動時間がキーポ  
イントです。教えることを全面に出せば出  
すほどあれもできなかつた、これもうまく  
いかなかつたとマイナス思考が募るばか  
りです。**わずかな成長部分でも見出し、  
プラス思考で活動していただきたいと思**  
います。

財団法人 日本アウトワード・バウンド協会  
事務局長 木谷尚史

## 指導者の目標設定の基盤

ある小学校の先生が1年生の生活科  
の授業の中で、「冬といえばこたつでみか  
んを食べるけど、それ以外の季節を表わ  
す風景を思い出してください」と言ったと  
ころ、子どもの反応はまばらでキョトン  
としている子がいたとのことである。その  
理由は「こたつ」が分からない子どもが  
クラスの1/3もいたのである。日常生活  
の利便性は生活様式や仕事の形態まで  
大きく様変わりさせており、先生のイメ  
ジと子どもの生活様式がずれたものと

なっている。

自然体験活動で長年指導者をされて  
いる人も、この様変わりしていく子ども  
たちの様子に気付いている方も多であ  
ろう。マッチが擦れない、火をおこせな  
い、刃物が扱えない、仲間と群れること  
ができない…など、今の子どもの状況を  
話せばきりがなくであろう。改めて、  
子どもの教育的活動に関わる指導者は、  
**今の子どもの生活状況を把握し、対象  
となる子どもに身に付けさせたい知識や**

**技能、行動等を明確にし、実施する活  
動やプログラムの展開方法を定める必要  
がある。**そして、活動後には**絶えず当初  
の目的がどの程度達成できたのかを指  
導者間(あるいは、保護者を交えて)で  
確認し、次回の活動・行事に活かしてい  
くことが求められているように感じる。**

中京女子大学  
教授 平田裕一



girls worldwide say  
“build a better world”  
Girl Scouts of Japan  
Celebrate 90 years of Girl Scouting in Japan  
2010, the year for Girl Scouts

平成20年度 文部科学省委託事業 青少年元気サポート事業  
少女のための元気サポートプロジェクト [報告書]

## 少女の自己肯定感を高めるキャンプ

発行 2009年3月 / デザイン・印刷 (株)トライ

社団法人  
ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原 1-40-3  
TEL 03 (3460) 0701 FAX 03 (3460) 8383  
<http://www.girlscout.or.jp>  
E-mail [gsj@girlscout.or.jp](mailto:gsj@girlscout.or.jp)

